

KOBUNSHA BUNKO

土屋隆夫



長編推理小説

天^{てん}狗^ぐの面





光文社文庫

長編推理小説

てんぐ
天狗の面

著者 土屋 隆夫

1989年6月20日 初版1刷発行

発行者 大坪昌夫
印刷 慶昌堂印刷
製本 榎本製本

発行所 株式会社 光文社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03 (942) 2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Takao Tsuchiya 1989

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70960-5 Printed in Japan

光文社文庫

長編推理小説

てん ぐ
天 狗 の 面

土屋隆夫

光 文 社

『天狗の面』目次

序	天皇の住む村	7
第一章	天狗も欲情するか	22
第二章	死の狂詩曲 <small>ラァソッデイ</small>	38
第三章	土田巡査の憂鬱	54
第四章	見えない手	63
第五章	天狗問答	77
第六章	毒殺の論理	92
第七章	夜ごとの点景	107
第八章	天狗の鼻について	121

	第九章	天皇暁に死す	129
	第十章	特に総理大臣に任ず	135
	第十一章	誰が風を見たでしょう	150
	第十二章	北風とアリバイ	165
	第十三章	蠟燭の消えた時	181
	第十四章	面・手帳・煙草の箱	196
	第十五章	おりん、空をとぶ	205
	終章	真相（潤色多き物語）	222
解説		新保博久 <small>しんぼひろひさ</small>	256

序章 天皇の住む村

会いに来たかよ 牛伏村へうしおせ

越した峠は 七曲がりとうげ

都そだちにや 及ばぬけれど

おぼこ娘も 餅をつくもち

ホンニヨイヨイ 山そだち

昭和の初期、村の青年団と婦人会が首唱して牛伏音頭をつくり、小学校の校庭で発表会を催した日の、はなやかにも感激にみちた光景を記憶している人が、今日、幾人あるだろうか――。その日、校庭の中央に組み立てた舞台の上から、団員達の打ち鳴らす太鼓の音は、まだ朝靄あさもやの立ち迷っている牛伏村の隅々にまで響き渡った。

音は、左右の山の山の側面にぶつかり、それがはねかえって、重なり合ったまま家々の戸口にころがり込んでくる。

人々はせき立てられるように、続々と校庭に集まって来た。当時、青年団長だった池内市助のごときは、抑えきれぬ感情のはけ口を両方の握りこぶしにこめて、誰彼の見さかいなしに肩を叩いて叫んだ。

「見ろや、あの人を。おい、成功だぞ。な、成功じゃねえかよ」

そして幾度も便所へ駆け込み、一晚かかって作り上げた「牛伏音頭発表の御挨拶」をひそかに練習した。

昼近く——なんと人々は、五時間も校庭に立ちつくして太鼓の音に心をそり立てられていたのだが、いよいよ開会を知らせる三連発の花火が、景気よく打ち上げられるに及んで、人々の興奮は頂点に達した。

青年団長池内市助は、開会の挨拶を述べるべく舞台の上に立ったが、群集の中から湧き上がった拍手によって、彼は体がグラグラと前に傾くのを防ぐのに精一杯であった。一晚がかりの草稿はなんの役にもたたず、彼はただ同じことを幾度も繰り返した。

「我々はその、牛伏村の文化のために、その、村を愛し……愛する村の文化のために……全く我々は生命も惜しくはないという決意を持っているのであります……」

善良なる人々は、幾度でも、同じ文句に拍手を惜しまなかった。彼は満足し、定まらぬ視野の中にうごめく、黒々とした一団に向かって、泣き出したような感動を味わったのである。来賓の挨拶はいずれも同じで、作詞の優秀さを讃え、村長のごときは「県下に誇る最高の芸

術的音頭であるという確信」を披瀝ひれきした。

つづいて、団員と婦人会員による振り付けが披露ひろうされ、村人達までが、いつかその中に加わって、踊りの輪が校庭一杯にひろがる頃、牛伏村全体が、濃い夕靄もやの中に、すっぽりとつまれていったのである――。

全く楽しい時代であった。それは、生活の豊かさを言うのではない。ともかく、人々の心に、安らぎと牧歌的な情緒が残っていたのである。

その証拠には、終戦後、やはり青年団の手によって発刊された牛伏時報に、次のような投書が掲載されたのを見ても判ると思う。

「牛伏音頭なんて、全くだやな歌だ。青年団はこの歌の廃止について、討論会を開くべきだと思ふ。越した峠は七曲がりなぞという文句は、いたずらに我が村の交通不便と非文化性を誇示するだけだ。こんな文句を有難がつているから、牛伏村は近隣の女性から敬遠されて、近頃は嫁に来る者が少ないという話だ。おぼこ娘も餅をつく、とは一体なんだ。昔から、餅をつく力は親にも貰もらってこない、といわれるほどの重労働だ。この村では、おぼこ娘も餅つきをするほど力があるぞと、自慢したのは昔の話だ。いまどき、腕と足と腰だけ太い、ズングリ型の山ざる娘など、誰が好すくものか。第一、おぼこ娘が餅をつくなぞという文句は、考えようによれば、随分エロな話ではないか。女性侮辱はなはも甚はなだしい。牛伏村の全女性の皆様よ。立ち上がって牛伏音頭追放に御協力下さい」

果然、牛伏村の青年団は、この投書をめぐって賛否両論が対立した。

女性側には、圧倒的に廃止の意見が多かった。

「ホンニヨイヨイ山そだち、なんて言葉は、働きものを嫁に貰え、というような農村の古い考え方の現れだとオラ思うです。オラ達女性だって、結婚は労働の始まりだなんて思いたくねえです。この歌は第一、民主的な男女平等つう考えが足りねえで、女をバカにしているところが多いから反対です……」

民主的——神のような権威と神秘にみちたこの言葉は、団員達の心に大きな共感を呼んだのである。

「そういえば、民主的でねえな……」

「戦争前の歌だから、封建的だわさ」

「じゃ、民主的な牛伏音頭をつくることはどうだね」

「いいな。一般から募集してな。千円も賞金を出したらよからず」

このような雰^{ふん}囲^{いき}気^きの中で、牛伏音頭追放の意見は、青年団によって決議されたのであった。すべてが音たてて崩れて行く一瞬の光景であった。かつて、夕靄のせまる校庭で、踊りの輪に加わった人達の中で、誰がこのような事態を予想し得たであろうか。

当時の青年団長で、現在村会議員である池内市助は、息子の伍郎^{ごろう}からこの話を聞くと、悲憤やるかたない面持で叫んだ。

「馬鹿どもめ。今の若いもんには何が判るだ。民主的でねえと？ 何をぬかす。口ばかり一人前で働きは半人前だ。いいか、この文句は村長が感心して、県下に誇る最高の芸術的音頭だと折紙をつけたんだぞ。芸術ってものは、大したもんだ。芸術なんてものは、お前、もう誰にも出来ることじゃねえ。いいか、芸術だぞ。昔の人は、みんな芸術が判ったんだから……ああ、長生きはしたくねえ……」

彼はそのまま立ち上がった。どつとこみ上げてくる情感が、彼の心をせつないほど締めつけ、それがまた、一杯飲まなきや納まらねえな、という判断に移行した。

「出かけるぜ。今夜は区長の協議会があるからな……」

女房のサキにそう言うと、相手に返事をする余裕を与えない素早さで、手荒く表戸を開けていた。

牛伏村全体が濃い夕闇の中にしずんでいる。三月の下旬だというのに、はだを刺すような冷たい風だ。最近、村で一軒だけの飲み屋「千鳥」が開店した。丘を越えた隣村落の入り口にある。

池内市助は、手拭で頬をつつむと、雑木林の中にならぬり続く道を歩き出していた。両側をうずめるすすきの穂が、ざわざわと風にゆれている。彼は見えない空間に向かって、力一ぱい牛伏音頭を歌い始めたのである。

ちようどその頃。

村に駐在する土田つちだ巡査が、二里の峠道を越して、ようやく、牛伏村の入り口に差しかかったところであつた。

彼はこの村に移つてまだ三日目であつた。前任者が脳出血で急逝きゆうせいしたのである。

町の署から転勤を命ぜられ、初めて駐在巡査として赴任して来た日、家財道具をのせたトラックの上から、心細げに周囲の山々を見つめている妻の横顔に気づくと、彼はつとめて明るい声で呼びかけた。

「なーに、住めば都だよ。それに、のんびりと落ちつけて、山の中つてもものも、またいいところがあるものさ」

だが、不幸にして彼の予言は適中しなかつた。つまり、この村には歯科医というものが無い。四十六歳の土田巡査は、入れ歯の完成までに一週間というところで転勤となつた。彼は着任早、町の歯科医まで二里の峠道を越さなければならぬ運命に、まだその時は思い当たらなかつたのである。

さて――。

土田巡査は今、牛伏村の入り口にさしかかつた。そこには、最近建てられたばかりの火の見ひみ櫓やぐらがある。鉄製の高い楼上から裸電球の火が、ボンヤリと道を照らし出している。街燈のないこの村では、まことに唯一の暗夜の灯であつた。

土田巡査の乗った自転車が、このわびしい光の輪の中に入った瞬間、彼は突如として前方におどり出した男のために、危うく自転車から転げ落ちそうになった。

「誰だ。危ないじゃないか」

だが、男は黙ってそこに立っている。

「誰だね、君は、今頃どこへ行くんだ」

だが、男は一向に口を開こうともせず、平然とそこに立っている。いや、平然というより、なにか無言の威圧をこめて、土田巡査の顔を見つめているのである。

三十歳ぐらいであろうか。うす汚れた国民服を着て、手には鉛筆と手帳を持っている。広い額の下に、瞳だけがなにか異様な光を放っている。

「おかしな男だね、君は。用事があるなら言ったらどうだ」

その時初めて、男は口を開いたのである。

「侍従長はまだ来ないかね」

土田巡査は、一瞬アツケにとられて、ボンヤリとその男の表情に見入った。

「東条とうじょうが組閣名簿を今夜提出することになっている。すみやかに内閣を一新して、非常の事態をのり切らねばならない。侍従長はどうしたのか……」

この瞬間、土田巡査は、はじめてこの男が狂人であることを覚ったのである。民衆保護の任にあたる警察官の意識が、彼の心を通りすぎた。

「侍従長は間もなく参上致します。陛下、すみやかに御所へお帰りを……」

土田巡査の言葉は、誠に効果的であつた。男はゆっくりとうなずいた。

「よし。帰ろう。しかし、組閣は今夜中に完了せよ」

奇妙なことに、この瞬間、土田巡査の胸中に、言うべからざる悲壮な感情が溢れ出したのである。彼は心底からの感動をこめて男に呼びかけた。

「陛下、ますます御体にお気をつけのほどを——」

その時、闇の向こうから、一人の少女が小走りに近よつて来たが、二人の姿を見るとそこに立ち止まった。少女の息づかいから、かなり長い距離を走りつづけたことがうかがわれる。

「まあ、兄さん、こんな所に……」

「あなたの兄さんですか……」

「はい——少し気が変になつてるもんですから……」

少女は恥ずかしそうにうつむいた。

「ほう——病院へは……」

「あの……ふだんはおとなしく寝ておりますし、乱暴もしませんので……それで、前の駐在さんも、家で看病してやれ……」

「いつから発病したね」

「はい。兄は役場に勤めておりましたが……なんでも戦争の終わるすぐ前ごろ、アカだとい

噂うわさがたつて……」

「アカ——？」

「共産主義者だなんて……それで憲兵隊へつれて行かれて……二、三日したら病人だから帰すというので喜んでいましたら、こんなふうになって」

「なるほど……」

土田巡査は、すべての事態を了解した。

当時狂気のような暴威をふるった憲兵隊が、どのような圧力をこの青年に加えたかは問うところでない。ただこの青年が、正常から異常に移る直前の一瞬に、自己を天皇に転化する以外、この暴圧から逃れる術すべのないことを覚った心理の推移が、せつないほどの実感となって、土田巡査の心に映じたのである。

「家まで送ってやるかね」

「いいです。すぐそこの役場ですから……」

「役場——？」

「そこで、オラと母さんが、住み込みの小使をやっていますから……」

さつきから、無表情に二人の対話に聞き入っていた男が、突然、手帳の一枚をひきちぎって、それを土田巡査の前に差し出した。

少女が恥ずかしそうに口ごもった。